

個体化の多数性と存在の統一のかなたに  
(情報・エネルギー・システム)

——ジルベール・シモンドン思想の射程 (1)——

廣瀬 浩 司

東京大学教養学部 外国語科研究紀要

第42巻 第2号 1994年

Reprinted from

The Proceedings of the Department of Foreign Languages and Literatures.

College of Arts and Sciences, University of Tokyo

Vol. 42, No. 2 (1994)

Printed by  
K. K. BUNKEN-SHA  
Chiyoda-ku, Tokyo

個体化の多数性と存在の統一のかなたに  
(情報・エネルギー・システム)

——ジルベール・シモンドン思想の射程 (1)——

廣瀬 浩 司

...le chiasme lie comme envers et endroit des ensembles d'avance unifiés en voie de différenciation / d'où au total un monde qui n'est ni un ni 2 au sens objectif—qui est pré-individuel, généralité—

Maurice Merleau-Ponty

序

ジルベール・シモンドン (1924-1989)<sup>1)</sup> は、とりわけフランスの思想界にあっては、『技術的諸対象の存在様態について (*Du mode d'existence des objets techniques*)』(1958)の著者として知られてきた。この書の課題は、技術的对象と呼ばれるものの生成過程を追い、それを文化に統合して「技術的文化 (*culture technique*)」の思想を練り上げ、機械による人間の疎外といった従来の図式を乗り越えることにある。他方、彼の純粋に哲学的な著作『個体とその物理的—生物的発生 (*L'individu et sa genèse physico-biologique*)』(1964)のほうは、ジル・ドゥルーズのたび重なる引用にもかかわらず、現在にいたっても再版されていない。

しかし彼の死後1989年、技術的对象論の増補再版にともない、個体化論の未刊の後半部も出版され、ようやく彼の思想を総体として捉える動きが見られるようになってきた<sup>2)</sup>。技術論において使用されている彼固有の概念、すなわち「個体化 (*individuation*)」、「前個体的なもの (*préindividuel*)」、「ポテンシャルなエネルギー」、「位相 (*phase*)」といった概念は、この個体化論のほうでよりくわしく説明されている。本稿では、彼の個体

化論に焦点を合わせ、その理論的および哲学的射程をさぐっていきたいと考える。

1960年の、フランス哲学会における彼の講演にはっきり見られるとおり<sup>9)</sup>、個体化論における彼のひとつの課題は、熱力学や情報理論の成果を受け、形式の概念を根本的に考え直すことにある。その意味では、ゲシュタルト心理学やゴルトシュタインの大脳生理学を受けた、メルロ＝ポンティの『行動の構造』や『知覚の現象学』などの仕事をやり直そうという試みである、ということができよう。じじつこの講演でのひとつの問題はゲシュタルト心理学の乗り越えなのである。シモンドンが知覚的对象ではなく、技術的对象を分析することをめざしたのも、この文脈で理解することができる。

他方、のちに見るように、シモンドンは個体の理論を文化一般に拡張する一方、一種の存在論を練り上げることをもめざしている。この文脈では、メルロ＝ポンティの後期の存在論と、多くの接点を持っているように思われる<sup>10)</sup>。

以上の視点からまず、彼が「個体化」とよぶ問題系の意味を検討する。そのうえでこの個体化の理論から存在論への移行、という課題のはらむ問題点を指摘し、われわれなりの課題をさぐっていくことにしよう。

## 1. ヒューレー・モルフェー主義批判

シモンドンの著作のひとつの柱は、ヒューレーとモルフェーの対立、形相と質料の対立を、両項の共通の源を暴き出すことによって解体し、思考を転倒させることにある。つまり、彼がアリストテレスに起源を求める、ヒューレー・モルフェー主義 (hylémorphéisme) の抽象性を指摘し、それが隠蔽している「晦冥な領域 (zone obscure)」を暴き出すことだ。さらに彼はこの晦冥な領域を思考の中心に据え、そこに働いているひそかな作用を記述していこうとする。この作用を彼は「個体化の作用 (opération d'individuation)」と呼ぶ。

それでは、ヒューレー・モルフェー主義は、どのような意味で抽象的なのだろうか。彼はまず、粘土を直方体の型に入れて煉瓦を制作する、という例を挙げ、この技術的作用 (opération technologique) がどのように煉

瓦という具体的な個体を生成させていくかを丁寧に記述していく (IG, 28)、彼によれば、煉瓦というひとつの個体を、純粋な形相 (形式としての型) と純粋な質料 (素材としての粘土) との結合、と考えることはできない。なぜなら、それは次の二つの系列の作用の収斂する点に成立するからである。

まず、素材である粘土は、ある程度の等質さと湿り気をすでにそなえ、その属性において、かたちを取る (prise de forme) を能動的に準備していなければならない。質料は、形相によって受動的にかたちを受け取るだけではなく、いわば暗黙の形式 (forme implicite) を内在的に備えていなければならないのである (IG, 42)。

反対に、形相である型のほうも、ある一定の強度その他を備えたものとして準備され、すでに職人のしぐさや一種の物質性を先取りしていなければならない。だから一般に形式化 (mise en forme) として理解されているものは、こうした異質な二系列の収斂する場、形式と内容がともに参与する作用の場に関係しているのである。と言うよりはむしろ、まずこの二系列が相互に関係しあうひとつのシステムから思考を始め、このシステムのさまざまな様態の一段階として、形式化を捉えかえさなければならない、とシモンドンは言う (IG, 33)。

かたちを取る、ということは、システムにおいて質料と形相とが共同しておこなう作用なのだ。エネルギー的な条件が本質的なのであり、それは形相だけによってもたらされない。かたちを取る、ということは、奥行きにおいて、全体的におこなわれる作用であり、質料がそれじたいに対して持つエネルギー的な相互関係の結果なのだから、このポテンシャルなエネルギーの場は、システム全体を占めている。(…) 質料とは、このエネルギーの担い手であり、形相とは、この同じエネルギーの配分を転調する (moduler) ものだ (IG, 39)。

このように考えるならば、形相とはいわば、このシステムの「トポロジックな境界 (limite)」 (IG, 39) なのであり、さまざまな力が収斂する作用点のシステムとして、構造を転調するものなのである。純粋な形相と呼ばれているものは、この境界のひとつを抽象的に絶対化したものにすぎない。

他方質料は、それじたい生成への傾向、一種のポテンシャルなエネルギー

一をはらんでおり、つねに「それじたいにたいする相互関係」、すなわちおのれに対するずれをはらむことによって、形式化を準備している。この質料のおのれ自身にたいする関係を、シモンドンは「内的共振 (résonance interne)」と呼んでいる。

かたちを取りつつある質料は完全に内的な共振の状態にある。(…) 技術的な作用は、かたちを取りつつある質料において、トポロジックな条件とエネルギー的な条件を使って、内的共振を打ち立てるのだ。トポロジックな条件のことを、形式と呼んでよかろう。またエネルギー的な条件は、システム全体を表現している (IG, 38)。

このようにシモンドンは、形相と質料の二元的な対立に基づく思考にたいして、エネルギー的な概念を導入し、対立を相対化しようとする。この場合、形式化とは、物質的エネルギーとトポロジックな形式との出会いとして記述される。さらに、形相と質料との関係が本質的には瞬間的なものでしかありえないのにたいし、内的共振の概念を導入することによって、それをシステムのひとつの状態ないしはリズムとして、段階的に記述することが可能になる。このシステムの段階的な生成こそが、彼が個体化の作用と呼ぶものなのである。

ヒューレー・モルフェー主義の限界は、この個体化の作用の二つの系列の両極を、抽象的に絶対化したことにある。シモンドンはこの主義を、作業場の外にいて、そこに入るものとそこから出るものだけを考慮する主人の態度にたとえ、その社会的文脈を明らかにしている (IG, 40)。かたちを取る、という作用を、真に作用として理解するためには、作業場に入って職人とともに働くだけではなく、さらに技術としての型そのもののなかに、つまりシステムそのもののなかに入り込み、さまざまな内的共振の現れを内側から確認しなければならないのだ。

こうした考えは、もっと高度な技術的作用において検証されねばなるまいが、この点については、シモンドンの技術論をそれとして論じる機会にゆずりたい<sup>9)</sup>。さまざまな問題をはらむことを承知のうえでこの単純な例を検討してきたのは、すでにシモンドン思想の諸主題が、個体化の概念のまわりに結晶化しているからにほかならない。そこで、まずこの個体化の

概念をあらためて検討すべきであろう。

また、上に挙げた例からもすでにわかるように、ヒューレー・モルフェー主義の乗り越えのためには、エネルギー的な概念が不可欠であるが、ここまでの段階では、たんに記述上の要請から出された説明的ないしは排除的な比喩としてしか思われぬかもしれない。この概念をたんに比喩以上のものとするためには、その導入の意味をもう少し考えてみなければならぬまい。

## 2. 生成・システム・情報

さきに述べたように、個体化とはシステム内の生成にかかわるものである。シモンドンはくりかえし、個体化を、すでに構成された個体から理解するのではなく、個体化の作用から出発して、個体を理解しなければならない、と強調している。ヒューレー・モルフェー主義は、個体が生成する以前に存在する個体化の原理を求め、それを形相ないしは質料に割り当てようとする。そのばあい個体は、形相と質料との結合以上のものではない。それに対しシモンドンは、個体化の作用そのものの中に、その原理を求めようとする。

われわれは、個体化原理の探求にさいして、個体化の作用を根元的なものと考えることによって、ひとつの転倒を引き起こさなければならないことを示そうと思う。個体化の作用から出発して、個体は存在するに至るのであり、また個体の持つさまざまな性質は、個体化の作用の展開、制限、そして様態なのである (IP, *introduction*, 12)。

だが彼は、実体論や形式主義にたいして、たんに生成のダイナミズムを対置しようとしているわけではない。彼が議論の出発点に置こうとしているのは、おそらく次の二つの事態の共存である。

第一に、個体は、それに先立つ前個体的な (préindividuel) 次元に根をおろしており、そこから生成の力を受け取っていること。

だが第二に、個体化の結果としての個体の現れは、そのつど特異な出来事として、還元不可能であり、それぞれの現れは、システムのさまざまな



段階をかたちづくっていること。

いいかえるならば、シモンドンにとって重要であるのは、すでに構成された個体でも、また純粋にエネルギー的なものでもなく、個体とその媒体ないしは環境 (milieu) の結合 (couplage) の、そのつど特異な現れを見極めることである、とわれわれには思われる。

このことを説明するためには、さきほどの煉瓦制作の例より、シモンドンの思想のなかで「範例的 (paradigmatique)」(IPC, 15) な位置を占める例、すなわち結晶化の例を挙げたほうがよいだろう。

ある過飽和状態にある液体中の結晶構造を考えてみよう。この構造は、液体のエネルギー状態との関係で、安定状態にあるかぎりにおいて維持される。この状態は準安定状態 (état métastable) と呼ばれる。しかし、結晶構造の成立はかならずしも、このエネルギー的な状態によって説明つくされはしない。構造が到来するためには、そこに結晶核 (germe) が(たいていの場合外から) 導入されることが必要であり、この構造化は、臨界的 (critique) に、つまり不連続で不可逆な過程としておこなわれる。

非連続的なものは、連続的なものにたいして一次的である。だからこそ、個体化の研究は、非連続的なものをそれとして把握することによって、認識論的にも存在論的にも、多大な価値を持っている。(…) 個体化があるのは、実体についてではなく、システムについてなのだ。そしてこの個体化こそが、はじめの特異性を起点に、実体と呼ばれるものを産みだすのだ。(IG, 123)

だから、個体の発生は、構造的な核 (germe structural) という非連続性・特異性と、無定形な媒体という連続性の両者を関数として、記述されなければならない。

一方で、この核は、システム内部においてつねに局地的な特異性として現れる。他方、この局地的な核の特異性は、準安定的な連続性を媒体として、システムのあらゆる次元に少しずつ伝播し、その構造を組織していく。だから、ポテンシャルなエネルギーと呼ばれるものは、つねにこの特異性を通してしか、つまり構造の変化の場において局地的にしか顕在化しないようなものなのである。このことについて彼は、「個体化は歴史的だ」

(IG, 156) とすら述べている。

エネルギー的な条件を規定するためには、システム概念が必須である。なぜなら、ポテンシャルなエネルギーは、あるきまったシステムのなかで可能な、変換 (transformation) との関係でのみ存在するからだ (IG, 70)。

このように、シモンドンにおいて、エネルギー論的な概念装置は、つねにシステムや構造の概念と結びついてのみ意味を持つ。だから、個体化の結果としての個体は、この前個体的な連続性に根をもちつつ、同時に構造の分化の原理でもある。それは、つねに二つの側面によって規定されており、同時に、この二つの側面の媒介、結節点なのである。

こう考えるならば、生成しつつある個体は、その内部と外部とのトポロジックな境界そのもの、「関係」そのもの、あるいは——メルロ＝ポンティ流に言うならば——両者の「キアスム」なのである (IPC, 151)。この関係の特性を、いくつか挙げてみよう。

第一に、この関係は、概念ではなく、特異性を媒介としている。システムに突発する特異な非連続性は、ある構造的な出来事として働き、この同じシステムの内部に、個体とそれに結合した媒体 (milieu associé) というカップルを制度化する。この両項は、まさにこの関係を通して、内的に共振するのである。

このことをシモンドンは、「個体とは、限界づけられた存在 (être limité) である」と表現している (IG, 116)。それは「有限な存在 (être fini)」ではない。有限な存在は、それ自体によって限られた存在であり、無際限に拡張するエネルギーをはらんではいないからだ。それに対し限界づけられた存在の拡張は、決して完結しない。だから、個体の内部と外部との境界は、つねに活動する境界、つねに移動する境界なのである。それはつねに外部を分化しながら、同時に内部をエネルギー的に統合していく (IG, 59)。特異な出来事は、まさにこの内部と外部との境界に生起するのだ。そのとき個体は、この個体化という出来事の「動作主 (agent) でもあり、また舞台でもある」(IPC, 20)。

だから構造を、分化と統合、といった階層的な思考で理解することは

きないだろう。構造化する構造とか、構造化される構造、といった表現も、階層的思考の枠を乗り越えるものではない。あえてこの枠組みに妥協して言えば、はじめに与えられているものは、解体していく構造とあらたに制度化される構造との内的な関係であり、それらのパラドクサルな結合(キアスム)なのである。そしてこの結節点においてこそ、ポテンシャルなエネルギーは顕在化する。統合と分化という階層的な発想は、エネルギー論とトポロジーによって置き換えられなければならないのだ<sup>6)</sup>。

第二に、いままでふれられなかったシモンドンの思想の、もうひとつの重要なテーマにふれておかなければならない。それは意味の理論である。ジャック・ガレリーが指摘しているように、個性化の理論は、意味の理論、情報(information)の理論と、密接に結びついている<sup>7)</sup>。シモンドンにとって情報とは、メッセージではなく、まさに関係の意味そのものであり、やはり特異性を媒介とするのである。特異性がシステムに到来するとき、それはシステム内部に一種の内的で局地的な相克(conflict)をもたらす。そのときシステムは、問題をはらんだもの(problématique)となる。情報は、この内的な相克の解決として、問題の意味として考えられる。

簡単な例を挙げよう(IG, 256)。知覚世界において、右目と左目との像がちぐはぐ(disparate)になった時のことを考えてみよう。やがて両者の不調和が統合されたとき、奥行き、ないしはレリーフが知覚される。このときこの不調和という問題の解決としてあらわれる奥行きないしはレリーフこそ、この知覚世界の意味にはかならない(IPC, 27)。この場合、右目と左目それぞれの情報は、まったく失われていない。右目と左目の「総合」は、各項の具体性をそのまま保存している。にもかかわらずここで知覚される情報としてのレリーフは、知覚世界に潜在するものの顕在化として経験されるだろう。そのときそれぞれの像は、総合されるというよりは、あらたな構造のなかで内的に共振するのだ。

情報とは、ひとつの等質な実在に關係するものではけっしてなく、不調和(disparition)な状態にある二つの次元に關係するものだ。(…)それは二つの実在のあいだの緊張であり、二つの不調和な現実がシステムをかたちづくりうるような次元が、個性化の作用によって発見されたときに、立ち現れる意味なのだ。情報はだから個性化の口火を切

るものであり、個性化の要請であり、準安定状態から平衡状態への移行であり、けっして与えられたものではない(IPC, 22)。

情報がある形態にすでに与えられたものではないかぎり、メッセージという概念は適切なものではない(IPC, 67)。メッセージは、発信者と受信者との内的なコミュニケーションの結果ではあっても、それを構成する項のひとつではないからだ。それにたいし情報は、両者の「あいだ(entre)」(IG, 255)の緊張関係、能動的な交換関係そのものである。またそれは、両者の問題をはらんだ関係に内在的なものだ。情報によって、「解消されないシステムの不調和が、ひとつの次元となり」、この次元によって、解決が組織されるからである(*Ibid.*)。それは、システムがそのれを個性化するための、生成の意味そのものなのである。

情報とはこのように、ある異質な二つの次元のあいだに能動的なコミュニケーションが制度化されるときに現れる、両者の「差異の意味」(IG, 256)であり、ある個体が個体として現れる、という出来事に内在する、特異な意味なのである。

### 3. 個性化の理論から位相の存在論へ

以上で個性化の概念をめぐるシモンドン思想の主要なテーマを検討してきたわけだが、この概念を出発点に展開される「生物的(vital)個性化」、情動性や心身関係を論じた「心的(psychique)個性化」、さらには純粹心理学と純粹社会学を越えた集団論・共同体批判などを展開する「集団的(collectif)個性化」を論じた章や、これをうけたシモンドンの倫理学・価値論・規範論などについては、残念ながら立ち入ることはできない。これらは、熱力学的概念や情報概念を使って、「類比的(analogique)に」展開されるもの、とされており<sup>8)</sup>、かならずしも物理的な次元にすべてを還元するものではないが、この「類比」の正当性そのものの具体的な検討も、別の機会にゆずらねばなるまい。

さて、はじめに述べたとおりシモンドンは、われわれが検討した個性化の概念がある種の存在論へと練り上げていくことをもくろんでいる。ここではこの存在論がはらむ問題点をいくつか指摘しておきたい。

この存在論の根本的な前提は、個体化のひとつの条件とされる前個体的な地平は「第一の實在 (réalité première)」であり、ありとあらゆる生成に先立つ源である、ということにある (IG, 127)。彼自身これを、ひとつの「仮説 (hypothèse)」である、としている。そして問題は、この第一の實在から出発して、「個体とその存在的な補足 (complément d'être) を含む實在の総体を、発生的に理解すること」(IG, 73) である。この発生的作業を彼は「位相 (phase) の理論」として展開するわけだが、ひとまずこの存在論の概略を検討しよう。

シモンドンはまず、前個体的で準安定的な地平における、「存在の初源的な飽和状態 (sursaturation initiale)」を仮定する (IPC, 13)。それは、「統一性以上のもの (plus qu'unité)」であり、たえずそれ自身との関係において自己の位相をずらしていく (se déphaser par rapport à lui-même) ような存在である。したがって、位相をずらすとは、存在がたえず二重化 (se dédoubler) しながらい体化していくことにはかならない (IPC, 14)。個体化とは、たえずあらたな位相を創造していくことであり、個体化の理論は、存在の諸位相の理論なのである<sup>9)</sup>。

こう考えるならば、生成は、存在と対立するものではなく、存在そのものに内在するものだ。むしろ生成とは、存在のひとつの次元、つまり存在がたえずそれ自身をずらしていく能力の表現として考えることができるであろう、とシモンドンは言う (IPC, 13)。だから、存在はつねに時間性をはらんでいる。時間とは、つねに関係の時間であり、個体の境界そのものである。そして、個体とは、この生成の特異な「現在」において、一種のリズムとして、内的共振として存在するものだ (IG, 102)。時間それ自体は、「おのれを個体化しつつある存在の次元性 (dimensionnalité) の表現」(IPC, 27) なのである。

シモンドンはこの点に関し、おのれの思想を弁証法と区別しようとしている。個体化の作用同様、弁証法もまた、対立する項の総合であると同時に保存でもある。だが弁証法とことなり、シモンドンは時間を生成の枠組みとしては考えない、と言う。時間そのものもまた、他の個体と同様、前個体的なものから立ち現れるからである (IPC, 28)。弁証法においては、生成はじゅうぶん存在に統合されておらず、それは、存在を外から変化させるものであるかのようにも語られている。だが、シモンドンにとっては、

存在そのものが生成するのであり、生成は、存在の諸位相のさまざまな側面なのである。

さらに、シモンドンは否定的なもの (négatif) の意味を検討している。否定的なものは、存在において、ある緊張として、不調和として内在している。だがこの否定は、個体の生成のひとつの段階ではなく、個体化もまたその総合、統一への回帰ではない。否定的なものは、ポテンシャルなエネルギーに満ちた存在の豊かさの背面なのである (IPC, 27)。

このように理解された存在を前提とするシモンドンの存在論は、あらゆる論理学に先立つものである、とされる。ひとは個体化を「認識すること」はできない。われわれができるのは、個体化すること、おのれを個体化すること、おのれにおいて個体化することだ。個体化の認識ではなく、認識の個体化がめざされなければならない、とシモンドンは序文を結論する (IPC, 30)。

\* \* \*

シモンドンはこのように、個体化の理論を独特の存在論へと練り上げていく。だが、はたして彼は、説得力のあるかたちでこの存在論を展開しているであろうか、これがわれわれの問いである。

個体化の概念が古典的な哲学、とりわけ観念論の哲学にたいしてもつ批判的な価値は、十分強調されてよいだろう。だがこの個体化の理論から、シモンドンが存在論へと進み行こうとするとき、さまざまな疑問が提出される。この疑問はやはり、彼が「第一の實在」と考えようとする、前個体的なものの哲学的な地位にかかわるもの、あるいは、それにたいするシモンドン自身の一種のあいまいさにかかわるものであると言えるだろう<sup>10)</sup>。

われわれが上で分析した個体化の作用の記述においては、シモンドンは細心の注意をはらって特異性の現れを記述し、またそれが現れる媒体との関係の特殊性にも留意している。この段階で彼は、實在をそのさまざまな現れ (manifestations) を通してしか、すなわちシステムが変化するときにはしか把握し得ないことに注意をうながし (IG, 130)、この把握の「間接性」に自覚的である (IG, 115)。存在は、システムが変化するとき、「差異の意味」としてしか現れない。その限りにおいて、前個体的なものの実在性は、ひとつの要請であり、それぞれの現れにおいて潜在的な地平として予感されるものにすぎない。

システムにおける個体の生成は、段階をひとつひとつ追うことによつてのみ、たどることができる。(…) 個体化はたんに、個体化された個体の説明、という観点のみからは、考えられないだろう。それは、分離された個体の発生以前に、また発生の過程において、理解される、あるいはすくなくとも理解されるべきだと言われるだろう。個体化とは、そこから結果する個体よりも豊かな実在における出来事、作用なのだ (IG, 72, 傍点筆者)。

この引用で表明されているシモンドンのわずかなためらいは、最後まで維持されているであろうか？ この個体化の「現象学」と前個体的なもの「存在論」とのあいだの緊張関係は、どのように乗り越えられる、あるいは乗り越えられないべきなのだろうか。

おおくの論者が指摘することであるが、技術論のもっとも思弁的で、もっとも読まれることの少ない第三部において、シモンドンは哲学的な思考そのものを位置づけようとするのだが、そのとき彼は、生成の過程をひとつひとつ段階的にたどっていくのではなく、一挙に前個体的な場面に身を置いてしまっているように見える。ここで持ち出されるのは、哲学的な直観なるものである。

直観は、実在的な統一の中に、図的な (figural) 側面と地 (fond) 的な側面とを見いだす。(…) 存在の統一性とは、能動的な中心であり、そこから出発して二重化によって図と地が、すなわち諸要素と全体性とがあるのだ。直観は、この存在の統一、つまり諸要素と全体性との合一を認識し、完遂する。直観は、地と図との、それじたいにおける関係である (MEOT, 238)。

かくして、ヒューレー・モルフェー主義の「晦冥な領域」は、反転して「能動的な中心」となる。哲学は、このどこにでもあるが、つねに隠されている中心に、直観によって一挙に身を置くことしかできない。この中心を直観することにおいて、差異・特異性の間接的現象学と前個体的なもの「存在論」との総合が、果たされることになるのである。

また、哲学的直観には、魔術的な直観や美的直観を乗り越え、真に文化的な統一を創り出すもの、という役割も割り当てられている (MEOT, 238)、哲学とは、一種の包括的な人間学として完成されなければならない、というわけであろう。

哲学にわりあてられた、これらの奇妙に古典的な役割——すなわち直観による全体と部分との統一者としての役割、そして文化的なものへの統一者という役割——は、多くの読者をとまどわせるものだ。彼は、個体化しつつあるシステム (たとえば煉瓦制作における型) にまで入り込んでいた視点を放棄し、内側からの存在論の可能性をさぐるのではなく、一挙に統合者の視点に身を置いているようにみえる。

このことに対する最終的判断は、彼の技術論の十分な検討を経たのちにおこなうべきだろうが、シャトーのように、すべては存在の一段階と考えることができる、という「存在のリリスム」「オブティミズム」をここに見ることも可能であろうし、また——シモンドン自身は、古典的な自然主義や汎神論から身を引き離そうとしているにせよ (IPC, 110, 160, 196)——、彼をプロチノス流の自然哲学の系譜に連ねてこと足れり、とするバランのような立場も可能ではある<sup>11)</sup>。

だが問題は、個性の理論がはらんでいる、特異性の現れの「現象学」と、過剰な存在の統一の「存在論」のどちらかを選ぶこと、また——シモンドン自身が次の引用で暗示しているように——、諸存在の多元論と、存在の一元論とのどちらかを選ぶことではないはずである。

不連続性の概念は、存在の難起的な諸位相の適合 (compatibilite) の可能性の仮説と組み合わせられるならば、位相の不連続性の概念となる。唯一の存在は、個体化されたものとかがえられるならば、ともに現前する複数の位相にたいして存在しうるものなのであり、おのれ自身で、位相を変えることができるのである。部分の多数性とはことなつた、存在における多数性がある。このことは、存在の統一性の水準の下に多数性を置くものではなく、まさにこの統一性の水準に多数性を置くものだ。多数性とは、存在のそれ自体にたいする多数性であり、存在のある位相と存在の別の位相との関係における多数性であるのだから、(…) 個体化の一元論は、個体化の多元論に置き換えられ

なければならない (IPC, 217).

シモンドンが存在論を、かならずしも特異性の哲学、多様性の哲学、他者性の哲学としては展開していないことはあきらかである。だが、特異性、多様性、他者性について語ることだけでは、現在ではそれほど批判的な力を持ち得ないだろう。われわれは、シモンドンが予感した前個体的なものの実在性の要請そのものは、要請として受けとめるべきであると考え。そうでなければ、ふたたび観念論に閉じこめられるか、あるいは——超越論的な主体の介入をなお拒否するのなら——位相の存在論は、つねに諸位相の相対主義となる危険におびやかされ続けることになる。また極端な自然主義の復活を許すことにもなりかねない。まさにメルロ＝ポンティが50年代に予感していたように、自然の次元の慎重な考慮をおろそかにするならば、自然は強迫観念のごとく、どこにでもあり、どこにもないものとなってしまうのである<sup>12)</sup>。

もしほんとうに多数性を存在の統一性とおなじ水準におくべきだ、とするならば、彼の言う哲学的直観なるものの同一性そのものも、つねにこの問題ををはらんだ場によって、問いただされていかなければならないだろう。

哲学は、この多数性と統一性、同一性と差異との問題ををはらんだ関係にみずから巻き込まれつつ、なお思考し続けるものとならなければならないだろう。だから、個体化の多元論と存在の一元論との緊張は、たんなる多元論の肯定でもなく、存在の統一のさらなる直観によってでもなく、個体化の多元論の徹底化によって、あらたな間接的存在論へと深められていかなければならないはずである<sup>13)</sup>。

いずれにせよ、シモンドンは、前個体的なものを第一次的なものとする、哲学そのものの地位や、その言語化についての考察を、十分には練り上げてはいないように思われる。われわれはここで、『見えるものと見えないもの』において「問いかけ」の哲学として存在論を練り上げていく、メルロ＝ポンティの慎重な歩みを、もういちどたどりなおしてみるべきかもしれない。前個体的なものとしての肉の概念を導入するにあたって、彼は、反省哲学、弁証法、フッサールの本質論、そしてベルグソン流の直観論と批判的に対決し、彼自身の存在論を、あくまで間接的存在論として練り上げようとしていたからである。そしてこの存在論の背後には、特異な出来事の

哲学としての「制度化」の哲学があったのだ。存在の統一性の直観としての哲学ではなく、存在の制度化への問いかけの哲学がさぐられなければならないまい。

#### 注

- 1) シモンドンの主要著作を引用するにあたっては、以下の略号を使用する。  
IG: *L'individu et sa genèse physico-biologique* (l'individuation à la lumière des notions de forme et d'information), Presses Universitaires de France, 1964.  
IPC: *L'individuation psychique et collective* (l'individuation à la lumière des notions de forme, information, potentiel et métastabilité), Aubier, 1969.  
MEOT: *Du mode d'existence des objets techniques*, Aubier, 1958, 1969, 1989, préface de John Hart, postface d'Yves Deforge.  
なお未刊の講義をふくむ彼の文献表については、後述 Hottois のモノグラフィーのそれを参照されたい。
- 2) *Cahiers philosophiques*, juin 1990, numéro 43 の特集, 1992年の Collège international de philosophie 主催のコロク (出席者は、ルネ・トム、フランソワ・タリェール、ジャン・プティトなど) などを受け、Gilbert Hottois が1993年にモノグラフィーを発表している。Simondon et la philosophie de la «culture technique», Bruxelles, De Boeck-Wesmael, 1993. また Jacques Garelli も、後述の著作で、シモンドンへの関心を強めている。
- 3) «Forme, information et potentiels», *Bulletin de la Société française de philosophie*, séance du 27 février 1960, t. LII, de la p. 143-188. シモンドンの講演は、IPC, 31-69 に再録されているが、マルセル、ジャン・ヴァール、ポール・リクトール、ジャン・イポリット、ガストン・ベルジェらとの討論は、割愛されている。
- 4) 本稿は、メルロ＝ポンティの制度化の概念についてのわれわれの一連の考察と密接に関連している。「Problématique de l'institution dans la dernière philosophie de Maurice Merleau-Ponty», Thèse de Doctorat de l'Université de Paris I, 1994; Atelier des thèses de Lille, 1994 (microfiche); 『制度・出来事・構造』, 東京大学教養学部『教養学科紀要』, n. 26, 1993, pp. 59-80. 本稿では主に、これまで扱わなかった、物理的な次元における、個体とその外部との関係の制度化の様態の記述が問題となる。
- 5) たとえば IG では、個体化の作用を考慮することによって、三極管のなかの電磁場の形成と、煉瓦の制作とを、ひとつの視点で比較分析できるようになる、という (IG, 40).
- 6) 同様に、ベルグソンの開かれた社会と閉じられた社会という対立も、有効ではあるが、完全に適切なものではない、とシモンドンは言う。彼自身は、さまざまな拡張の度合いをはらんだ社会 (société) とまったく平衡状態に達した共同体 (communauté) という区別を打ち出している (IPC, 259).

- 7) Jacques Garelli, «Transduction et Information», in *Rythmes et mondes* (Au revers de l'identité et de l'altérité), Paris, Jérôme Millon, 1991, p. 324.
- 8) この点についての議論としては, Hottois, p. 34 を参照. またこの点は前掲のフランス哲学会における講演のあとのマルセルとの討論で議論されている. Cf. 前掲書, pp. 178-179.
- 9) 位相の概念も物理学から取られており, とりわけあるひとつの位相が, 他の位相との関係でのみ考えられること, それらのあいだに相互的な平衡と緊張があることが強調されている (MEOT, 159).
- 10) この点について, ホール・リクールは, 自然の次元に借りた概念によって自然と人間の総体を論じる可能性を疑問視し, 言術 (discours) における自然から出発すべきだとする. また, ガストン・ベルジェは, 現象学的な立場から, 主体に対する意味をみきわめるべきだとし, シモンドンの客観主義を批判する. 前述フランス哲学会講演のあとの討論, pp. 181-182, 188 参照. シモンドン自身は, 自然とは, 『個体がたずさえる前個体的な實在』のことだ, とする. そのばあい彼が念頭においているのは, 「技術者」としてのソクラテス以前の思想家, たとえばアナクシマン드로スである (IPC, 196).
- 11) J.-Y. Chateau, «Technologie et ontologie dans la philosophie de Gilbert Simondon»; B. Balan, «La philosophie de la nature de Gilbert Simondon», in *Cahiers philosophiques*, juin 1990, pp. 85-138.
- 12) M. Merleau-Ponty, *Résumés de cours*, Paris, Gallimard, p. 98.
- 13) Cf., Hottois, *op. cit.*, pp. 109-110.

電子署名者: 廣瀬 浩司  
 DN: cn=廣瀬 浩司, o=電子署名学, email=parergon@jcom.home.ne.jp, c=JP - 日本  
 日付: 2012.01.03 01:38:02 +09'00'

廣瀬 浩司